

〔魂の配慮〕

「自由」の逆説

山崎和明†

聖句

（ヨハネによる福音書八章三一b―三二、三六節、新共同訳より）

・・・わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。・・・だから、もし子があなたたちを自由にすれば、あなたたちは本当に自由になる。

説教

今週は社会学部週間となっております。私は社会学部で、社会思想や政治思想史を担当しています。その領域は、哲学ほど深く沈潜するものではなく、社会学ほど表層的ではない全領域と言っておきましょう。そのためか、私は社会学

† YAMASAKI, Kazuaki 本学社会学部教授、法学博士

部に属しておりますが、文学部の平和学メジャーも担当しています。それでは「自由」の社会科学考察に入ります。自由の味をしめた現代人は、自分の自由に加えられる一切の制限や制約をよしとしません。拒否します。規律・ルールを守れと言えば、自由を奪う抑圧者だと考えます。あたかも自分の自由が制限され制約を受けることを、権利の侵害であるかのように主張します。

本学でもよく見られるように、とことん自分の自由を追い求めると、先生の教えや社会のルールを無視し、つまり何事かに従うこと、誰かに服従することを拒否します。そして愚かにも、最後には、低劣愚劣な自分の欲望や感情、気分の奴隷となり、自分自身から解放されず隷属状態に陥るのです。これは自由の逆説的真理の一つです。

この地上において人間は、何の制約も制限も受けることなく、思いのまま気ままに自由を行使・実現することはできません。規律であれ、ルールであれ、何かの制約を受けて初めて、自由が実現できるのです。ちょうど、重力や摩擦という制約があればこそ、滑ることなく、この地上を歩けるようなものです。あるいは、人間が宇宙の何もない無重力空間に置かれるなら、支えとなる「基軸」がないため、前後左右上下すら分からなくなります。またその上、大気圧という圧力がかからないとなると、人間は膨張して形を失い、存在すらできなくなります。「支えとなる基軸」を持ち、それに従うという制約・制限があつてはじめて、人間は真に自由を実現できるのです。これも自由の逆説的真理です。

憲法学の具体例でお話ししましょう。たとえば、基本的人権としての自由権を取り上げてみましょう。私たちは、基本的人権として自由権を獲得しています。基本的人権とは、福沢諭吉の訳では「天賦人権」、つまり天が人に与えた権利、すなわち生まれながらにして得ている権利（生得権）として認知されています。しかし、日本国憲法でも「公共の福祉に反しない限り」と自由権に制約を課しています。ある人の基本的人権である自由と、別の人の、同じく基本的人権の自由とがぶつかり合うことがあるわけです。すると互いに、「公共の福祉に反しない限り」と自由権に制約がかつてくるのです（ここでは何が「公共善」という基準が問われますが、今回はこの問題に入りません）。ともあれ、真に自由を実現するためには、制約をかけざるを得ないのです。

では、もっと明白な自由の制限制約を考えてみましょう。たとえば、何人たりとも侵害することのできない、つまり不可

侵の基本的人權に属する自由であっても、不正・不義や悪を行う自由はありません。不正・不義は、被害を受ける者にとって悪であるのみならず、加害者にとっても悪なのです。悪は、悪を行う者自身をも害するのです。自由に悪を行うことは可能なのですが、悪を行う自由は、自由を破壊する行為であって、自由を実現する行為ではないのです。それゆえ、自由を放棄したり自由を譲渡したりする自由も許されないのです。

人は悪を行うとき、悪を行う自由があるのではなく、実は悪の奴隷となっているのです。今朝の聖句と聖句との間の三四節で「罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である」とイエス・キリストは断言しておられる通りです。悪をも行いうることが完全な自由のように見えて、実際は、隷属状態に陥り不自由になるという逆説の事例です。

それゆえ、たとえ可能であっても、悪のために自由を濫用しない。ここに、自由人の責任と義務が生じます。自由という権利に責任や義務という制約を加えることによって、本当の自由となるわけです。真に自由であるためには、自由に制約が伴い、一見、不自由でもあるのです。不自由のように見えて、実は、真に自由であるという逆説的真理です。

これらの自由の制限や制約と言えるものは、むしろ悪の支配に陥ることからの解放なのです。それは、決して不自由でも苦痛でもありません。皆さんも経験があるでしょう。たとえば、愛する人や物、好きな事柄のためには、自分の自由や楽しみを犠牲にすることや、自分自身が犠牲になることですら、苦痛ではなく、むしろ喜びであることを。たとえ形式的には不自由と見えても（自由を断念することがあっても）、真に自由であるための喜ばしい自由の制限や制約であって、自由をより高い次元で実質的に完成成就させるものなのです。

【独裁者】 別の政治的事例を見てみましょう。自分の思い通りに人を動かし、思い通りに事をなすことのできる独裁者を考えてみましょう。独裁者は、生殺与奪の権力を持ち、何でもできる神のような存在でありながら、実は、まったく不自由な人間なのです。なぜなら、独裁者は、愚かにも、自分の好むままに実現しようとし、自分の計画、自分の夢、自分の理想を実現しようとし、自分自身から解放されない自分自身の奴隷になり果てているのです。しかも、独裁者の場合、必ず追従者を必要とします。独裁者と追従者との関係は、ちょうどサディストとマゾヒストとの関係と同じ相互依存形態の一種です。どちらも相手を必要とし相手が存在しないと生きていけない、自主独立できない存在なので

す。

およそこの世において、人間には、全知全能の神のみに相応しい完全な自由を行使することも実現することもできません。しかし愚かにも、人間は自分の完全な主人になれると考え、あたかも人間が全知全能の神であるかのように君臨し、人間以上の存在の支配や拘束を退け、意識するしないにかかわらず、人間が神のようになろうとしています。一種の偶像崇拜です。

愚かな人間や独裁者とは違い、賢明な人間や君主は、自分を超える「崇高なもの」(真善美)、あるいは「至高の存在」(神)に、自分の従うべき基軸を求めることによって、自分自身から解放され、真に自由な人間になり、そして名君にもなりえるのです。次に、まことの至高の存在、神なる創造主を知った人間が、どれほど自由であるかを知る宗教社会的事例を取り上げてみます。

【旧約の世界】 ユダヤ人も、キリスト者も、同様にヤーヴェの神を、唯一の創造神、万物を創造された唯一の神と信じています。そしてユダヤ人もキリスト者も、モーセの十誡を今も戒めとして守っています。とりわけ十誡の第一戒、真の神以外のものを神としない、そして第二戒、神に似せた像を造らないという偶像崇拜禁止は重要です。

唯一の創造神を信じることによって、一切の被造物の支配から解放されます。創造主によって創造された被造物である太陽や月、星や惑星、自然の力や、山や石や岩の自然(物)、あるいは空、海、陸に生息する動・植物、さらには英雄豪傑、高貴な人といった人間、これら一切のものを、唯一の創造神に並べて、神に代わる偶像とすることはありません。精神的、霊的に(つまり究極的に)被造物に支配されないということです。もちろん、この世的な領域で、物理的生物学的に影響を受けないという意味ではありません。むしろ、相互に影響を与え、大いに影響を受ける場合もあります。しかし人間は、天地創造の神を信じ、唯一の神に「つながる」とき、人間は同じ被造物によって人間の自立性を奪われることも、隷従させられることもなくなります。たとえば、星占いが好きであつても星座に縛られることがないのです。

むかし日本人は、諸々の霊が宿る霊場と呼ばれる山岳で登山やスキーをスポーツやレクリエーションとして楽しむこと

はありませんでした。それは、神々の棲む霊山である聖地を遊び半分に訪れることは不謹慎であり不浄を招くものであったからです。修験道の行者や仏僧などが修行のために聖なる山を回峰することはあっても、俗人がスポーツやレクレーションで山に入ることはありませんでした。登山やスキーが日本に入ってきたのは、明治時代にやってきた欧米の宣教師やお雇い外国人教師によります。彼らには、山や自然は、いかに壮大で人間を超えた力を帯びていても、自分たちが信じる神の造られた被造物に過ぎませんでした。実際、登山やスキー関係の用語は、ドイツ語や英語が使われていることから、日本の伝統的なものでないことが分かります（シュラーフ「寝袋」、コッヘル「飯盒」、アイゼン「滑り止めの金具」、ザイル「綱」、ゲレンデ「スキー場」・・・）。

こうした例を見れば、人間が真の創造主を神として基軸に据え、それに従いそれにとどまるならば、どれほど解放され自由になるかが明らかでしょう。実は、このように、ユダヤ・キリスト教の神を基軸に据えることによって初めて、人類は、自然の諸々の霊や諸力から解放されたのです。そうして初めて、神々の宿るといわれる自然を客観的に科学的に探求し、観察し、実験することが可能となったのです。私たちが現在享受している近代の自然科学もこうして成立したのです。

【新約の世界】 今朝お読みしました聖書箇所は、「（もし）わたし「イエス・キリスト」の言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、（その）真理があなたたちを自由にする」と御子イエス・キリストは教えています。また「だから、もし子があなたたちを自由にすれば、あなたたちは『本当に』自由になる」とも教えられました。

この方の「言葉」とは、何でしょうか。ヨハネは、この方ご自身が「言葉」であり、「神と共に」あり「神で」あったと証言しています。さらにヨハネは、この方すなわち神の言葉によって、万物が「できた」「なった」「造られた」と証言しています。つまり、この方、この言葉によらずに「できたもの」「なったもの」「造られたもの」は何一つないということです。天地万物が、この方、この言葉によって創造されたのです。もし私たちが、その言葉である方、その方にとどまるならば、（私たちは本当にその方の弟子であり）私たちは真理を知り、その真理が私たちを自由にすると、

イエス・キリストが教えられました。

では「子」とはどういう人物でしょうか。神であり、神の独り子であるイエス・キリストのことです。神の独り子イエス・キリスト自身が、「私は、道であり真理であり命」であると証言されています。また「私を通らなければ、誰も父なる神のもとに行くことができない」とも教えられました。このイエス・キリストが私たちを自由にすれば、私たちは「本当に！自由になる」と、ご自身が約束されているのです。

真理が私たちを自由にする。これは真理です。人間が好き勝手、思いのままにできることを自由であると錯覚しているのは、真理を知らないからでした。真理を知り、真理である方にとどまるなら、真理を基軸に私たちは本当の意味で解放たれ自由になります。もしこの真理である方から離れるならば、私たちは某かの被造物の支配を受け、その奴隷となることを意味しているのです。

祈祷

天地万物を創造された神様、この地上にあるかぎり、あなたの御子イエス・キリストにとどまり、イエス・キリストの弟子として従わせてください。再び被造物を恐れ、諸々の霊や諸力に囚われることのない解放された自由人として最後まで歩ませてください。道であり、真理であり、命である主イエス・キリストの御名を通してお祈りします。アーメン